学位論文題名

奇門遁甲書と類似暦の研究

学位論文内容の要旨

序論では、研究対象である奇門遁甲に関わる『占事略決』『五行大義』及び六壬式についての研究を紹介し、また山川九一郎氏に関わるものとして類似暦の研究を紹介している。そして、日本においてこれまで殆ど研究されてこなかった奇門遁甲の実態を、山川九一郎著『奇門遁甲千金書』を読み解くことで解明するという本研究の主目的を示している。

第一章「奇門遁甲の基礎的研究」では、山川九一郎著『奇門遁甲千金書』という書の解説をするために、その前提として「奇門遁甲」の基本的概念や理論についてまとめている。

『遁甲演義』や『奇門遁甲秘笈大全』により奇門遁甲の基本概念を考えると、甲を除いた乙・丙・丁を「三奇」とし、戊・己・庚・辰・壬・癸を「六儀」として、八卦の入った洛書九宮の枠に組み合わせ、その他、休、生、傷、杜、景、死、驚、開の「八門」、直符、騰蛇、太陰、六合、勾陳、朱雀、九地、九天の「八神」(あるいは太常を入れて「九神」)、また天蓬星・天任星・天冲星・天輔星・天英星・天芮星・天柱星・天心星・天禽星の「九星」を並べて「遁甲盤」を作り上げ、占う年月日時を六十干支で表し、「天の時」「地の利」「人の和」に基づいて占いを行う。その占い方には、洛書九宮の八枠を円盤に見立てて回転移動させる排宮法と、洛書九宮の数の順序通りに移動させる飛宮法があり、山川九一郎著『奇門遁甲千金書』は天盤では排宮法を用い、地盤では飛宮法を用いている。奇門遁甲は方位学(空間の学、洛書学)でもあり、干支学(時間の学、暦学)でもあり、つまりは時間と空間を統合した術数の学と言える。また、九神・九星が天、九宮が地、八門が人という、「天・地・人」をイメージした世界を構成している占術である。

第二章「山川九一郎著『奇門遁甲千金書』について」では、『奇門遁甲千金書』の内容を翻刻し、それを逐一解説し、その理論を使って(一部はその理論を推測して)奇門遁甲の占術の実践を試みた。結果として『奇門遁甲千金書』は、ある日時における吉方を導き出すことを主な目的とし、また奇門遁甲の占術を実践しやすいように簡略化していることがわかった。そのやり方はまさにその「八門遁甲天盤地盤畧図」に集約されており、これがこの書の肝要な所となっている。吉格・凶格の用語については、なお不明・未詳な点が多いが、本研究により、その理論や仕組みは、ほぼ解明できている。

第三章「山川九一郎著『九星農家要用記』の翻刻」では、『九星農家要用記』の翻刻と校訂を行っている。少なくとも二種のバージョンがあり(以下、奥書により「後藤本」と「大炊本」と称す)、書名は異なるがどちらも山川九一郎の編輯したものであり、暦注の内容が殆ど同じである。しかも同じく明治十六年度用なので相互に校勘が可能なものである。翻刻は後藤本を底本とし、『九星農家要用記』の本文を読みやすい字体や楷書に直し、大炊本によって校訂している。

明治五年にそれまでの太陰太陽暦から太陽暦へと暦が改められたが、公から出された官暦では暦注(日取りの吉凶の占辞)が迷信的だとされて削除されてしまった。しかしそれは民間の不評をかい、旧暦時代の暦注と、六曜・九星・三隣亡など新しい暦占が掲載されて

いる所謂「おぼけ暦」が明治十五、六年(1882、1883)頃から闇出版され、「偽暦」「類似暦」と称されて、取締の対象とされるようになった。『九星農家要用記』も「おぼけ暦」の一種で、旧暦・新暦の両方が併記されており、日々の暦注が記されている。

第四章「山川九一郎著『九星農家要用記』の暦注の用語解説」では、『九星農家要用記』に現れる暦注についての解説を行っている。各解説では、安倍晴明著と伝えられる『篋篋内伝』の記述の有無を確認し、記述がある場合には引用して解説している。

第五章「山川九一郎著『奇門遁甲千金書』の著作意図」では、同じ山川九一郎編著で、同じ年度用(明治十六年癸未歳用)の吉凶判断の書として出版された『奇門遁甲千金書』と『九星農家要用記』との両書と比較し、『奇門遁甲千金書』だけが著作権免許を受けた理由を考察して、その著作意図を探っている。

比較検討した所、『九星農家要用記』は、新暦の日日にちに旧暦の日日にちを対応させ、すべての日々にちに吉凶が書いてある典型的な暦書で、六曜・九星・三隣亡などの新しい占いを含む暦注で埋め尽くされているので、当然ながら、「類似暦」「偽暦」として政府から禁止され、「著作権免許」は無い。それに対して『奇門遁甲千金書』は暦書ではなく暦注もなく、三式の一つとしての占書であり、「類似暦」「偽暦」とはみなされないので、禁止されずに「著作権免許」が下りたと推測している。さらに、巻末の「癸未年吉日表」にはある日々にちと時刻における方位の吉凶が書いてあるが、それも「旧暦」ではなく「新暦の月」に基づくので、これも政府の禁止を免れた理由であるとしている。

奇門遁甲の占いの拠り所となっている二十四節気と日時の干支とは、そもそも新暦・旧暦の月日の差異の影響を受けない。これに着目した山川氏は、従来あった奇門遁甲書を参考にそれを簡略化して、新暦・旧暦の違いに影響されない使いやすい吉凶判断の方法として、『奇門遁甲千金書』を考案し出版した、と結論づけている。山川が本書を著作した意図は、単に政府の禁止を免れるためだけではなく、伝統や由緒がありながら「空論の術」としてあまり見向きもされなくなっていた奇門遁甲に新たな生命を吹き込み、新暦時代にも対応できる(新暦・旧暦の違いに影響されない)有効な吉凶判断の方法として蘇らせ、世に問うためであったと推定している。

学位論文審査の要旨

主査 准教授 近藤 浩之
副査 教授 佐藤 鍊太郎
教授 池田 証壽

学位論文題名

奇門遁甲書と類似暦の研究

本論文は、これまで日本において殆ど研究されてこなかった「奇門遁甲」という占術の実態を、明治十五年に出版された実用的な奇門遁甲書の一つである山川九一郎著『奇門遁甲千金書』を読み解くことで解明し、なおかつ明治改暦という歴史的状況を背景として、同じ山川九一郎編輯の『九星農家要用記』との比較を通じて、その著作意図を明らかにしようとするものである。すでに学会誌（『中国哲学』第38号、第39号）や紀要（『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』第10号）で発表された三つの論文と、翻刻・校勘の資料とをもとにして、前後に新たに書き足した序論と結論を配する形で構成されている。

序論は、先行の研究の蓄積が乏しい当該分野において、関連のある『占事略決』『五行大義』及び六壬式についての研究と、山川九一郎に関わる明治改暦と類似暦についての研究とに焦点をしばって、その現状と課題を簡潔にまとめ、奇門遁甲という研究対象を、どのような位置づけで研究していくべきなのかを示している。特に明治改暦や類似暦との関係という視点を導入するのは新しい発想として評価できる。

第一章「奇門遁甲の基礎的研究」では、奇門遁甲という占いの方法の基礎的な考え方や仕組みを抽出し、複雑多端な奇門遁甲の術の要点を的確に理解できるように概説している。

第二章「山川九一郎著『奇門遁甲千金書』について」では、第一章の成果を前提に、『奇門遁甲千金書』の内容を正確に翻刻しつつ、その理論や仕組みを丁寧に説明し、それによる実際の占い方を考察している。特に、奇門遁甲の占術を実践しやすいよう簡略化するために編み出された「八門遁甲天盤地盤畧圖」の意味と使用方法を解明し、この図こそがこの書の肝要な所であることを明らかにした点は非常に高く評価できる。

第三章「山川九一郎著『九星農家要用記』の翻刻」では、二種の版本を使って、『九星農家要用記』を丁寧に翻刻し校訂を行っており、文献学的にも国語学的にも一定の資料的価値がある。また第四章は、第三章の翻刻にあたって出てきた暦注の用語を解説したもので、現代の運勢暦における一般的な解説にとどまらず、一つ一つ『靈筮内伝』の記述の有無を確認して解説した所に一定の学術的意義がある。

第五章「山川九一郎著『奇門遁甲千金書』の著作意図」では、同じ編著者により同じ年度用として出版された『奇門遁甲千金書』と『九星農家要用記』とを比較し、『奇門遁甲千金書』だけが著作権免許を受けた理由を考察し、結論的には、その著作意図が、単に政府の禁止を免れるためにとどまらず、「空論の術」としてあまり見向きもされなくなっていた奇門遁甲を、新暦・旧暦の違いに影響されない吉凶判断の方法として蘇らせ世に問うためだっただろう、と指摘した点は大いに評価できる。特に明治改暦という特殊な時代的状

況の中でこそ、新暦と旧暦で日付が異なっても変わることのない二十四節気と日時の干支に基づく奇門遁甲の性格が浮き彫りになり活かされるという見通しと、その実用化のために工夫された「八門遁甲天盤地盤畧圖」を含む『奇門遁甲千金書』の著作意図とは、類似暦との比較を通じてより鮮明になっており、本研究全体の価値と意義を大いに高めている。

本研究は、もともと関連性の薄い奇門遁甲と類似暦という二種類の日取り占いの文献を、同じ編著者・山川九一郎と明治改暦という歴史的状況とを紐帯として、結びつけて比較検討することを通じて、最終的には奇門遁甲の、術数学・占術思想における根本的な特徴を明らかにすることに成功しており、今後この分野の研究の発展に寄与する新たな材料と方向性を提供するもので、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものである。